

『ニヤーヤ・マンジャリー』写本の欄外注について

室 屋 安 孝

0. 九世紀頃のカシミール地方はニヤーヤ学派の活動や思想の展開を知る上で特別な位置にある。ニヤーヤ学派の展開に影響力をもった学匠たちの作品のほとんどが散逸し、彼らの思想の多くは引用などを通じて間接的に知られるのみであることを考えた場合、カシミール地方で活躍したとされるバッタ・ジャヤンタ (Bhaṭṭa Jayanta, 以下 BJ) は稀有な例外である。BJ の三篇の著作は忘却と廃棄を免れ、現存する文献として既に出版されている。代表作に数えられる『ニヤーヤ・マンジャリー』(Nyāyamañjarī 「論理学の花房」, 以下 NM) が、作品誕生の地となったカシミール地方で長い間一定の関心を集めながら伝承されたことは、現存するいくつかの伝本がシャーラダー文字やカシミール系デーヴァナーガリー文字で記されていること、また以下に述べる欄外注の豊富さなどから容易に推測されよう。

1. 本小論では、NM 写本研究の一環として、筆者が利用できたいくつかの伝本を用いて、写本文とは別に欄外に記されたテキスト、いわゆる欄外注について報告する。また欄外注の研究の実際と方法を論じながら、ニヤーヤ学派の思想の伝承過程の考察と、その一事例を提示することを目的としている¹⁾。

1. 1. 本小論で扱う NM 写本で欄外注を含むものとは以下の 4 本である：1) ASC 所蔵写本 (Acc. No. G10991, Devanāgarī 文字, 紙写本, 374 枚, 以下 C), 2) SUB 所蔵写本 (Acc. No. Mu I 95, Śāradā 文字, 紙写本, 18 枚, 以下 G1), 3) 同館所蔵写本 (Acc. No. Mu II 26, Śāradā 文字, 紙写本, 18 枚), 4) BHU 中央図書館所蔵写本 (Acc. No. C1015, カシミール系 Devanāgarī 文字, 紙写本, 80 枚, 以下 V)。

2. 上記写本の欄外注はテキストの層によっておよそ 3 種に分類できる：1) NM 本文への付注あるいは注釈, 2) 付注とは別の典籍の引用, 3) 2 の引用典籍への注釈である。欄外注がこのような複雑な階層をもっていることは、NM が後代のパンディットや学習者など広義の読者、利用者によって研究され学習されていた伝統の存在を示唆していると考えられる。欄外注の多くは、C 写本を除いて、NM 第一日課に集中している。これらには奥書など著者等を特定できる書誌情報

(224) 『ニヤーヤ・マンジャリー』写本の欄外注について (室 屋)

がないので、付注の作者の人物像、複数の作者の存在の有無、著作年代などは明らかではない。ただし上記4写本の現在までの分析から、複数の注釈者、解説者が存在した可能性が高く、それらは伝承の過程で — 伝承の枝分かれによる細分化、あるいは同一の伝承経路の中での追加、修正、増補によって — 徐々に多様化していったのではないかと推定される。紙幅の都合で詳細には立ち入らないが、C, V, G1 写本の欄外注は、付注の内容や誤写を共有していることから、明らかに同一系統に属する。

2.1. 上述のテキストの3種の階層のうち第二について述べる。この第二のテキストは、興味深いことに、大多数を占める通常の付注とは異なり、際立った特徴をもつ。このタイプのいくつかのテキストは“iti tīkā” (以上が注解である)や“atha tīkā” (「では注解によると」)という明示的な表現を伴い、転写上の特別なフォーマットをもたずに欄外に組み込まれている。「注解」として言及されるこのテキストは、実のところ *Nyāyamañjarī-Granthibhaṅga* (『論理学の花房』難所の解明; ed. Nagin J. Shah, Ahmedabad 1972, LDS 35; 以下 NG) に同定できる。NG とは十一世紀頃に活躍したと推定されるチャクラダラ (Cakradhara) によって記された著作で、NM に対して現存する唯一の注釈である。NM 写本の欄外注にたとえ部分的とはいえ NG の本文が発見されるということは、NM 写本の伝承者 (おそらくパンディットのような学者) が、当時カシミールに存在したであろう NG 写本を NM 研究に用いたことを明確に示している。

2.2. NM 写本の欄外に見出される NG 本文に限定して言えば、本文批判をする上での重要性を3点指摘できる。第一に、NG の本文批判に利用できる一次資料が増えるということ。現在利用できる二種の刊本はいずれも事実上一本の伝本に基づいて校訂されている。第二に、欄外注から回収される NG 本文によって、刊本前半部分の底本となったジャイサルメール写本 (写本番号 ji. tā. 386, Devanāgarī 文字, 貝葉写本, 以下 J) の欠本箇所を補うことができる。第三に、刊本の「補遺1」において K という略号で翻字されている貝葉破片 (patrakhaṇḍāni) が、本来どの部分の写本であったのかを特定できる。逆に、判読可能な破片部分が NM 写本の欄外注に対応する限り、第二のタイプの欄外注が NG に属することを裏付けることになる。

3. 上述の NG の断片のうち、欠本箇所を補うケースを一例のみ以下に紹介したい。これは筆者が「断片2」と呼ぶものである。断片2は G1 写本 (G1 f. 2v) にしか見出されず、初版本に部分的な対応箇所 (補遺1, 順に K13B3, K15A3-6,

K15B3) が知られるのみである。ここで再構成された本文は NG の一つの注釈全体に相当すると考えられる。

3. 1. NG の再構成テキスト（断片 2）：

“vedārthopayogipadādi^(a) vyutpādanadvāreṇa” (NM I/6, 9-10 = Kataoka 2007: 181, 3-4) iti, yad āha^(b) bhaṭṭaḥ —

yat tāvat padavijñānaṃ jñeyaṃ vyākaraṇena tat /
 kaścit padārthabodhaś ca prakṛtipratyayānvayāt //
 lokavyākaraṇābhyāṃ ca yeṣāṃ artho na gamyate /
 niruktadvārikā teṣāṃ^(c) arthābhivvyaktir iṣyate //
 sandihyate hi^(d) sāmānyarūpā yatrāpi devatā /
 mantre tatrāpi sā spaṣṭaṃ niruktād eva gamyate //
 karaṇasthānayatnānām udāttādeḥ svarasya ca /
 grastādinām ca doṣānām śikṣātas tatra nirṇayaḥ //
 gāyatrībr̥hatītriṣṭupkakubusṇiganuṣṭubhām /
 jagatyādeś ca vijñānaṃ chandovicītilakṣaṇāt //
 uttarāyaṇapūṇyāhatithinakṣatranirṇayaḥ /
 chāyāgaṇitamārgena^(e) jyotiṣām udayādayaḥ //
 vedaikadeśasākhāyām^(f) kāṇḍaprakaraṇāśrayāḥ /
 sarvakarmavidhistotramantrānāma^(g) samāptayaḥ //
 saṅkīrṇā viprakīrṇāś ca vedādhyayanadhāraṇāt /
 kalpasūtrair vivicyante nyasyante^(h) ca pratikriyam //

iti.

(Selected Variants: <a> padādi-] J, K, cf. also NM I/6, 10; padārtha G1. yad āha] G1; yathāha J, K. <c> teṣāṃ] G1; caiṣāṃ J, K. <d> hi] G1; ti J, K. <e> -mārgena] J, K; mātrena G1. <f> -deśasākhāyām] conj.; deśā [bhūtā] yāḥ śākhā G1; † J, K. <g> -nāma-] em.; nyāsa G1; † sa J, K. <h> nyasyante] conj. by Jambuvijayji; naśyante G1; † J, K.)

3. 2. 和訳：「ヴェーダの意味・内容に役立つ語などの解説を通じて」に関して、バッタは「次のように」言っている。「[六つのヴェーダ補助学のうち] まず、単語の認識は文法学の知識対象である。また単語の意味に対する特定の理解は、語基と語尾の結合に基づいている。また一般的用法と文法学によって意味の理解されない諸々の単語の意味を明瞭にすることは、語源学を通じてであると考えられている。というのも、[祭式で用いられる] 祭詞に関して、[他の神格と] 共通な

(226) 『ニヤーヤ・マンジャリー』写本の欄外注について (室 屋)

形をもつ [ので, どの神格が賞賛されるべきか] 疑わしい神格は, 語源学によってはじめて明確に理解される. その [祭詞] に関して, 発音, 発声部位, 発声努力 [の確定知], また *udātta* (高いアクセント) を始めとするアクセント [の確定知], また *grasta* (不明瞭な母音の発音) を始めとする発声の諸々の不備の確定知は, 音声学に基づいている. *gāyatrī*, *br̥hatī*, *triṣṭubh*, *kakubh*, *uṣṇih*, *anuṣṭubh*, また *jagatī* を始めとする [他の韻律] の認識は, 韻律分析学の定義に基づいている. 太陽の北進, 吉祥な日, ティティ, 星宿の確定知は, 日時計の影の算定という道によっている. 諸々の天体の出現など [も日時計の影の算定に基づく]. すべての祭式における規定文, 称賛, 祭詞, 名称の完全な獲得は, ヴェーダの一部であるヴェーダ学派における [祭式の] 区分や主題に基づいている. ヴェーダの学習と記憶による保持によって混合し, また分散してしまった [規定文, 称賛, 祭詞, 名称] は, 祭儀学の諸々の経典によって, 祭事行為毎に [混合したものは] 区別され, また [分散したものは正しく] 配置される.」

3.3. 筆者はこれまでのところ「バッタ」の作品から引用されている上記テキストの典拠を特定できていない. しかし NM や NG における「バッタ」の用例や文脈などから判断して, 例えば『大注解』(*Br̥hattikā*) のようなクマーリラの散逸した作品から引用された可能性も十分にありうるのではないかと考える.

4. 本小論における報告と考察は, 筆者が現在行っている 4 本の NM 写本の欄外注の翻字作業をもとにした分析に基づいている. 関連写本の相互関係, 第 2.2 節で述べた欠本部分の再構成と翻訳, 本小論で扱った点の詳細などについては, 近々刊行予定の別稿を参照いただきたい.

1) 本小論で使用した写本の使用および複写の許可を与えてくださった Asiatic Society of Calcutta (以下 ASC), Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen (以下 SUB), 及び Banaras Hindu University (以下 BHU) と, また NG のジャイサルメール写本の利用許可とコピー入手を全面的に支援して下さった Muni Shree Jambuvijayji 師に謝意を表す. 第 3 節で扱ったテキストに関して貴重なご批判とご意見を下さった片岡啓准教授, Elisa Freschi 博士, 矢野道雄教授, 黒田泰司教授, 丸井浩教授, Karin Preisendanz 教授に記して厚くお礼を申し上げます. (紙幅の都合により注 2 以下割愛)

(オーストリア学術研究助成基金 FWF No. P19328 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 *Bhaṭṭa Jayanta*, *Nyāyamañjarī*, *Cakradhara*, *Nyāyamañjarī-Granthibhaṅga*, *Kumārila*, 写本, 欄外注

(ウィーン大学研究員, 博士 (文学))